

アイユーゴー 通信 第5号

申し込み及び問い合わせ先: **アイユーゴー** ‘途上国の人と共に’ 事務局

住所: 590-0432 大阪府泉南郡熊取町小垣内1-10-18

TEL/FAX: 0724-52-8340 ・ 090-9167-7053 (新田)

e-mail: aiyugo@rinku.zaq.ne.jp homepage: <http://aiyugo.fc2web.com>



ーベトナム文化情報省が1995年に、防止策として、設置しましたー

【ベトナムの貧困と麻薬文化】

「貧困と麻薬文化撲滅のための提言プロジェクト」は、平成13年10月15日に、本会が設立されてから掲げてきました大きなテーマであります。人間にとってもっとも重要な教育の問題が絡んでいるからです。

今年度からベトナムで取り組む事業を紹介しながら教育の必要性を考えて行きたいと思います。

ベトナム政府は、1998年に、ベトナム中南部のラムドン県ダラット市から30Km離れた村のある地区を、「貧困地帯」と位置づけました。小学校の教育環境があまりにもひどく、少数民族(cil チリ族)の子どもたちのためにそれぞれ2ヶ所小学校を建設します。小学校を建設する集落のひとつ、Pangtieng Dangit (パンチエン ダンギツ)には、電気も無く、水もありません。

ダラット大学社会福祉学部では、タイ学部長たちを中心として貧困削減センター『Center for Poverty Reduction: CPR』を立上げ、「飢餓削減計画」を作成するため調査に取組みました。ダラット大学のボランティア300名を中心に調査した結果、村人の人材育成が急務であるという結論に達しました。しかし、どこからも資金援助を得ることができず、計画は頓挫していました。

若者はほとんど教育を受けないまま、村を離れる傾向があると聞きました。しっかりした義務教育を受けていない分だけ、親達も子どものことが心配だそうです。実は恐ろしい光景を見ました。

この村は、ダラットの北にあり、ホーチミンから国道20号線を北東に320kmの所にあります。車で走っていると、大きな町にさしかかるたびにに見える光景があります。

麻薬防止、エイズの危険性を訴える看板であります。



看板を通して最愛の子供たちに触れさせてはならないことを子供たちに伝えています。データーから見ると、どれほど伝わっているのかわかりません。

最近の統計ではベトナム全土で183,000人の麻薬患者がいたそうです。最初にエイズ患者が出たのは1990年12月です。それから2002年までに13,067人までになりました。このうち75.8%が麻薬にも手を出したそうです。逆のケースも多く見られます。麻薬とエイズの予防の看板がどこも同じように並んでいるのはそのせいなのでした。患者数はさらに増加しています。

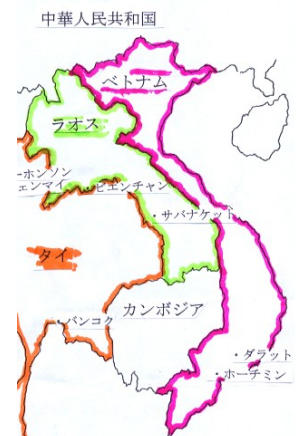
防止のための看板の設置はベトナム政府が取った苦肉の策だったのです。

アイユーゴーが小学校を建設する場所

アイユーゴーが二つの学校を建設する村の名は、ラット村といいます。この村は1963年に誕生しました。ベトナム人(kinh キン族)の4つの集落と少数民族の6つの集落、さらに4つの混合集落(キン族と他の少数民族)から成っています。

有名なドンナイ川の上流に位置し、山岳地帯にあります。ラット村の面積は、広大で23,640ヘクタールあり、小学校を建設する予定の2つの集落は30km離れています。

ラット村の人口は、全体で665世帯、3489人で、そのうち少数民族が77%を占めています。生活の主体は農業です。



子どもたちの教育改善を目指して

本事業は、開発に取り残された地帯で子どもたちの教育環境改善を行うものであります。麻薬の使用防止、エイズに対する強い警告を発している看板は、教育環境の整わない貧困状態にある人たちに警鐘を鳴らしているかのように思われました。極めて危険な状況から脱するには「基礎教育」は欠かせません。



Pangtieng Dangit (パンチエン ダンギツ) 村の子供たち

日本での麻薬使用

麻薬などの怖さは、ほとんどの人が知っておられることと思います。日本の実態としては、2004年8月の毎日新聞によれば、「大麻の検挙者が34%増の1099人。内20代が33%増の633人で約6割を占めた。麻薬では合成麻薬MDMA(通称エクスタシー)など錠剤型薬物の検挙者が2.6倍212人。20歳代が3倍強の125人に激増した。覚せい剤は3割減の5821人」とのことです。

麻薬の怖さ

一昨年、ホーチミンから1時間北西に行ったブンタオ省の刑務所にベトナムの国会議員と視察に行ったことがあります。ここには麻薬患者や売春をした人たちが収容されていて、中に入ると、若い男女が、何列にも並んでマシン掛けや、草履作りなどの作業をしていました。声をかけようと近づくと、服役者が、急に振返りました。その顔があまりにも幼く見えたので驚きました。

「麻薬中毒」になると、治療のために入退院を繰返し、結局警察に連行され、刑務所に入ります。刑務所から出所して、真面目に働いても、結局悪い友達と再び出会い、麻薬にまた手をつけて、仕事をやめざるを得なくなるという繰り返しです。さらに、麻薬を買うために家族・親戚にお金をせびり、クスリを注射しては、狂って暴れ、家庭が崩壊します。悪循環はほとんど同じように反復するのです。ちょっとした弾みから、ちょっとした好奇心から麻薬を始めるのが大半です。急に気持ちがよくなり、元気がでて、嫌なことも忘れてしまうそうです。罪悪感がなく、他人に迷惑を欠けているとも思わないし、いつでも止められると思えるのが、麻薬中毒の実に恐ろしいところです。

ベトナム人で麻薬の犠牲者の多くは、少数民族に多いと聞きました。麻薬に限らず、貧しさゆえに悪の道に入るのは多いそうです。「麻薬→売春→HIV感染→エイズ」という悪循環に振り回され、強盗、殺人などの犯罪が多発しています。

現在では、10代の子どもたちに広がっていて、185,000人が中毒となり、その内64%が死亡したそうです。HIV感染者は昨年11月までに83,431名いたと言われています。本会の事業地ラムドン県では、昨年11月までに805名のHIV感染者がいて、その内106名が死亡したそうです。

ベトナムでの麻薬防止のための重要な対策は、子どもに中毒になったときの怖さを教えること、患者を収容するセンターで勉強、スポーツ、労働に従事させることだと言います。犠牲者のほとんどは小学校を出ていないか十分な教育を受けていないといわれています。そのために最も大切なことは、しっかりした教育にあります。

教育の必要性

義務教育の目的の一つは、人格上の発達を促すことにあります。そして健全な大人になるためには、社会の一員としての道徳、社会の規範を習得する必要がある、また当然、自己確立も欠かせません。さらに読む力をつけることにより世界観の拡大を図ることです。したがって、十分な教育が施されないならば、自分勝手な行動に走り、自分の欲望、考えのみを優先してしまいがちです。そうすれば、みんなで守るべき法律を無視してしまい、健全な市民にはなれません。義務教育は集団の中で自分の力を発揮し、自分自身の本能的欲求と葛藤しながら、集団のなかで自分をコントロールしながら、市民になるために学んでいくことにあるのだと思います。そうした意味でも基本的な教育環境を整えることは非常に大切なことであります。

現在、ベトナム人の日本語通訳者であるベト氏(ホーチミン在住)と、ダラット大学の学長(ベト氏の恩師)、ならびに社会福祉学部長タイ博士とともに、交流を深め、少数民族の教育・生活改善事業を共に考え、日越の学生を巻き込みつつ、支援活動を行うようになっています。昨年3月には、奈良県の白鳳女子短期大学生5名ならびに一般参加者7名が、そして今年の3月に一般参加者4名がダラット大学の学生と共に本プロジェクトのサイトでワークキャンプを行い、交流を深めました。(「ワークキャンプを体験して」参照)



小学校建設予定地周囲の整備を行うベトナムダラット大学生と日本人参加
(2005年3月19日から23日)



音楽を交えての交

流

牛銀行の開設

一方、本会は小学校を建設するときは必ず牛銀行を開設します。小学校管理のためと、村の中できわめて貧しい、わずかな耕地しか、もしくは全く耕地を所有しない村人に現金収入を提供するためです。

現地では、2000年以来3年間、ラムドン省の婦人連盟がこのコミュニティで貧困家庭の生活資金ならび農業開発資金の不足を補う施策で、有償資金を提供したことがありました。しかし、村人がその資金システムを複雑だとして理解できず、失敗に終わりました。タイ教授によれば、村人は、支援は働かずして手に出来るものとしか考えていなかったそうです。

本会の牛銀行システムは、住民が参加して小学校を建設し、牛銀行を利用するもっとも貧しい会員も含め、村人が一体となって学校を管理しながら、村が自分の力で活性化していくことを願うシステムです。

ラット村の牛銀行の契約書の一部を紹介します。

- 1) 母牛が産んだ子牛を売る場合、売却の半額を銀行が、残りを Kra Jan Hatuyen 氏が受け取る。
- 2) 出産が無理と牛銀行が判断した場合、母牛を売却し、Kra Jan Hatuyen 氏はその半額を受け取ることができる。

Kra Jan Hatuyen さんは村で最も貧しく田畑がほとんどありません。銀行は村役場の会計担当が管理します。

【タイの麻薬文化撲滅の取組み】

職業訓練センターの建設



立正佼成会の助成により建設された職業訓練所での式典

「貧困と麻薬文化撲滅のための提言プロジェクト」を行いましたのは、タイが始めてであります。それは、2002年に、タイのパタムタニ県バンクブーア地区コクリエン寺内(バンコクより西北50



km)に建設しました職業訓練所センターであります。この地区はビルマからタイ、ラオス、ベトナムに通じる麻薬ルートがあったと言われてる一帯でありました。現在は、このセンターで麻薬中毒患者が病院で治療を受けた後、社会復帰ができるように理髪、謄写版技術、壺造り、ブロック作りなどの指導を行っています。特に壺やブロックは自分が造り、自分が販売するよう指導をしています。このセンターの管理はコクリエン寺の和尚様が行っております。和尚様は、受講生の将来へ向けた講話も行っていきます。

コクリエン寺和尚様

このセンターの机・椅子などの教育資材は、関西で活動しているムエタイ倶楽部様(代表 和田 武彦氏)がご寄付してくださいました。



左から岡本有畜農業専門家、和田氏、新田アイユーゴー代表、県知事

農業開発センターの建設

さらに、タイ北部にあるビルマ国境のメーホンソン県バンマパー郡ワナルアン村では、麻薬文化を撲滅するために有機農業を村人に普及しようとする事業が、2003年から2004年にかけて行われました。

この郡では、ケシ栽培を止めさせ、有機栽培を促進するために、村人有志たちと本会とが共同して、「農業開発支援センター」を建設し、さらに、遠方から研修を受けに来る村人たちのために「宿舎」を建設しました。現在はこの郡にある38村のうち14村から村人が、センターで有機農法などの実施指導を受けています。



センター(左)、宿舎(手前)は(財)日本国際協力財団の助成金によって実現しました。

「今でも麻薬を吸う人はいますか」と開発支援センター長のソムヨット氏に尋ねてみました。「今は静かになっています。確かに3年前

よりよくなっている」と答えました。「本当にこれまで何度、ケシ栽培面積を減らして、コーヒーやマンゴなど換金作物の栽培を進めたいと思っていたことでしょう」。再度、開発支援センターを作ると、村人が麻薬から遠ざかる効果がありましたかと、センター長に聞きました。「以前はケシ栽培が盛んだったが、今は村人の問題意識が変わった。耕作地の面積が限られ、開拓できなくなっているから、(ケシ)栽培が出来なくなった」と。

しかし、センターの農業のリーダーたちにはいまだに警戒感があります。隣村のタムロット村長が2004年2月に暗殺されたからです。「この村は麻薬に通過点にもなっている。ここ2、3年は政府が押さえている観がある」と言いながら、やはり、周辺には密売ルートがあるということから、農業リーダーたちは、警戒感を持ち続けているのです。「今後、換金栽培に力を入れなくてはならない」と言う言葉にも力が入っていました。

郡政府は開発支援センターに対して何をしてくれるのかと言いますと、「研究のために助成金を出す、建物の建設費にはお金を出せない」とのことです。よく聞いてみると、中央政府が、バンマパー郡の人口、農業形態、また、村人の思想傾向、文化などの情報を欲しがっているらしいということでした。

センターの発展を目指して

現在、この開発支援センターには、38村のうち14村の農民が来て研修を受けています。開発支援センターが行おうとしていることは、農作物の肥料の作り方、栽培方法や水周りのことなどを実施指導すること、生産した農産物を、センター周辺に作る予定の集積場に集め、郡内で消費することを考えています。現在、車で7～8時間かけてチェンマイから食料となる農産物を運んでいます。センターの人たちは、その地で生産し、その地で消費する「地産地消」のシステムを築きたいと思っています。特に隣村(タムロット村)にある少数民族のその貧しい子どもたち(小・中・高)のために建設された大規模の全寮制の学校が大きな市場となるだろうし、自分の県で自給自足ができるようになるだろうとしています。

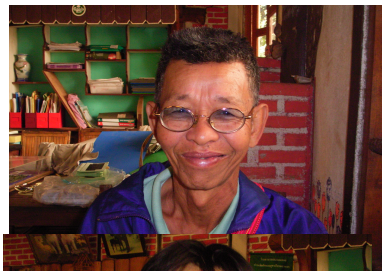


正面から見た開発支援センター

まだまだ、課題はあります。それは水のシステムの完備にあります。生活用水に関しては問題ないのですが、農業用水の整備を急がなければなりません。各村人には自分たちでシステムを作るように指導するつもりです。

センター長のソムヨット氏は、「センターと宿舎を大いに利用して、パイロット的な開発研修センターとしての機能を果たしたい」と抱負

を語りました。外部から講師を招いて、現在3～4日の研修コースを1週間コースにしたいとのこと。将来的には、しっかりした機能を持つようになるだろう。小中学校の学生が訪問し、見学できるシステムも作りたい」と今後の展望を述べてくれました。



ソムヨット氏
(センター長)



スティーブ氏
(バンマパー地区議員)

「生まれ育ったこの村の住民のために何ができるか、どのように支援できるかを考えてきた。土台としての建物ができる。バンマパーの中心的な、シンボリック的存在となった。これから住民を育てることができる。スタッフの養成も重要だ。役所、住民から信頼を得られるように頑張りたい。」と、地区議会議員のスティーブ氏は語ります。

また、センターで活動するスタッフ、チャムルーン氏が語ってくれた言葉が、とても印象的でした。「今までは、色々な少数民族がいて、色々な問題があった。上から押さえるような時代もあった。今では住民の声を吸い上げられるようになりつつある。この建物ができ、役場がこちらを向くようになった。」これこそNGOの仕事のひとつではないかと思いました。新しいメンバーとして入った若いショウセン氏は「建物に住民は満足している。この場で自分の質を高め、自分達の悩みを打ち明け、交流ができると思う。」と語ってくれました。

最後に、今後の課題としてあげられることは、電気などの維持費、講習費の徴収方法などのあり方、さらに、資金調達に関しては、野菜栽培からの収入によって賄うようにしなければならないと、メンバーの方々は胸に期待を含ませて話していました。

ご関心のおありの方は是非現地に一緒にしませんか。

<感謝の言葉>

日頃、本会の活動にご関心をもって頂き、そして、現地の人たちへのご支援頂き、こころよりお礼申し上げます。このたび、アイユーゴー通信の発行が大変送れましたことを心よりお詫び申し上げます。

ご意見、ご感想などお聞かせいただけましたら、幸いです。

今後ともよろしくお願い致します。

<広報活動>

アイユーゴーは地域への広報活動として、熊取町主催コンサートに協賛として参加しています。

会場のロビーにアイユーゴー活動の写真や活動状況を紹介しています。コンサート終了後のコーヒーのサービスを行っています。コーヒーはベトナムで栽培されたコーヒーを紹介しています。

まだ、地域にアイユーゴーの根を植えたばかりですが、皆様のご

協力で大きく育つことを期待しています。

— 編集後記 —

地域でのアイユーゴー活動をお知らせします。

事務局運営の充実を目指して、熊取地区の会員の方や地域の大学生のご協力を頂き、毎月一回事務所にて、アイユーゴー業務連絡会を開催しています。参加者は19歳から70歳と多彩なメンバーです。

業務連絡会に参加希望がありましたら、是非ともご連絡下さい。

編集長 岩見和孝 監修 田中 正明